



海外教育（特別）（実践）研究 A

オーストラリア

報告書

上越教育大学

目 次

参加者および指導教員名簿, 実施日	1
参加学生の感想レポート	2~5
記録写真	6~8



R3年度 海外教育（特別）（実践）研究A 「オーストラリア」

*参加者名簿

No.	所属1	所属2	所属3	学籍番号	学年	性別	氏名	フリガナ
1	学部	学校教育学部	言語系コース（英語）	302063M	4	女	関澤 妃菜多	セキザワ ヒナタ
2	大学院	学校教育専攻	文理深化・国語コース	20215207L	1	女	舟木 千絵	フナキ チエ
3	大学院	教育実践高度化専攻	先端教科・領域開発研究コース	20205604G	2	男	今井 洋太	イマイ ヨウタ
4	大学院	教育実践高度化専攻	先端教科・領域開発研究コース	20205602L	2	女	池田 実千代	イケダ ミチヨ
5	指導教員	学校教育学系	国際理解・日本語教育コース			女	藤谷 元子	フジタニ モトコ

*授業に関する実施日時

日にち	時間	開催クラス	学生チーム
令和3年9月13日（月）	10時25分～11時10分	ウエストミンスター・スクール4年M組	今井・舟木組
令和3年9月20日（月）	10時25分～11時10分	ウエストミンスター・スクール4年M組	今井・舟木組
令和3年9月20日（月）	14時15分～15時00分	ウエストミンスター・スクール5年G組	池田・関澤組
令和3年9月23日（木）	9時05分～9時45分	ウエストミンスター・スクール5年G組	池田・関澤組

*実施方法

Microsoft Teams

感想レポート



海外教育研究

所属 英語コース

氏名 関澤妃菜多(学部4年)

1. はじめに

私は、外国の子どもたちと交流したい、オーストラリアの教育現場を見てみたいという思いから今回の海外教育研究に参加しました。日本人学生が現地の子どものために授業をすることを通しての国際交流だったので、自分たちの授業の内容から子どもたちも学びが多く得られるように、授業づくりや実践練習を行いました。

2. 教育の比較

私が感じた学校現場の大きな違いは、授業時間の変動です。前にある授業の教科によって授業の開始時間が遅くなる、または次の授業に合わせて終了時間を早めるなどと、予定の時間通りに進まないことが日常茶飯事だと伺いました。毎日授業を受け持つ先生方は、子どもたちの1日の動きに合わせて臨機応変に授業を構成しなければならないためとても大変だと思います。一方で、授業実践においては日本とオーストラリアで多くの共通点に気づきました。特に子どもたちの反応に関してはオーストラリアも日本も同じでした。ねらいのある活動、分かりやすい説明や指示、視覚教材の準備など、国や文化が違っていても授業の基本は同じであると学びました。

3. Teaching Practice に対する振り返り

授業実践では、「はあっていうゲーム」を用いて、ジェスチャーや表情を付けて「ありがとう」、「えっ」などの日本語を話してみる活動を行い、子どもたちが表現豊かに話す姿が見られました。オンライン授業だったため、児童との深いコミュニケーションを行うことが難しく、教室にいる教員との連携が必要であると感じました。また、状況に合わせた英語表現が上手く出てこない場面がありました。授業実践を通して、オンラインで授業を行う際の課題、個人としての英語力・授業力の課題を見つけられたと思います。

4. 終わりに

今回のオーストラリアでの授業実践の経験は、日本とオーストラリアの学校現場の違いに関する学びだけでなく、授業の基本に関する学びも得ることができました。また、オンライン授業の課題や、環境を整えることでオンライン上での国際交流を行えるという可能性を感じました。今回の海外教育研究を通して得た学びと課題は、今後学校現場に携わる際に生かしていきたいです。

1. 準備期間

授業を受講する前は、この授業の流れがほとんど想像できず、英語での授業も学部時代のブリッジ科目で5～10分ほどの活動を大学生相手にやってみたというくらいで、この授業ではどんなふうに英語の授業を構想していくのが想像できなかつたのでかなりの緊張だった。他の受講者の皆さんは英語に触れあう機会が日頃からある方々だったので、ついていけるかより不安だった。準備期間では、オンラインでの授業経験もほぼない状況で、子どもたちが教室に集まったのパターンと、ロックダウンにより子供たちが各家庭から授業を受けているという2パターンの授業を想定して考えなければいけないのは本当に難しく大変だった。現職のお二方もオンラインでの授業経験はないとおっしゃっていたが、授業の構想やスライドづくりにおいて、その豊富な経験から、生徒たちへの配慮が必要な点を細かく気付いて下さり、本当に心強く、授業づくりの段階でも様々な学びがあった。

実際に授業を行うまでが本当に光のような速さで過ぎていったので、もっとじっくり授業を考えて、学生同士でもリハーサルや模擬授業などを重ねて活動自体の精度を上げたり、授業者としての心の準備を整えたりする時間があると良かったと感じる。

日本側が、コロナの感染状況により登校自粛になり打ち合わせをオンライン上で行わなければならない状況になってしまい、かなり条件が厳しい中での授業づくりではあったが、これほどまで追い込まれた状況で授業をとりあえず一通り作りきることが出来たという経験自体が非常に良い経験になったと感じる。

2. 授業当日

亀井先生との打ち合わせは事前に2回行わせていただき、その打ち合わせのときにはPCのトラブルはあまり目立って起こらなかったのだが、授業日当日、本番に限って授業開始直前に一時的にTeamsが繋がらなくなったり、パワーポイントの動画が表示されなかったりと、やはり本番にトラブルはつきものなんだと改めて分かった。また、何かトラブルが起こっても、ペアの今井さんのお力を借りて、パニックになることなく対処できたのが良かったと思う。今後実際の学校現場でもオンラインで授業が行われることも増えてくると思うので、オンラインでの授業の経験回数を増やして行って、PCの操作には慣れていきたいと考える。

授業は、事前に考えたスクリプトに沿って進めることが出来たのだが、前述したPCのトラブルが起こったときや、生徒たちのリアクションに対して反応を返したいとき、言葉を発したいが、英語でなんと話してよいか分からず何も話せなくてもどかしい思いを何度も経験した。もっと自由に英語の文が作れるようになりたいと考えた。何より第一に子どもたちの笑顔が見られて本当に良かった。最後に本授業の受講にあたって、現地でたくさんのサポートをしてくださった亀井先生、現地との連絡やオンラインでの授業のセッティング等々を行ってくださった藤谷先生、一緒に授業を行った今井さん、他の受講生のお二人にも感謝申し上げたい。

海外教育研究

所属 先端教科・領域開発研究コース

氏名 今井洋太 (M2)

1. はじめに

本講義では、オーストラリアのアデレードにあるウェストminster・スクールの子どもたちに、オンラインで日本語の文化を伝える授業実践に取り組んだ。私の最初の問いは「オンラインで日本の文化を知ってもらうにはどのような活動ができるか」ということだった。対面での実践と大きく違うのは、子どもたちと個別に関わる機会がもてないことである。そのため、一斉指導の形式をとりながらも、全員が楽しみながら、体験的に学ぶことができる「紙相撲」をテーマに学習に取り組むことにした。

2. Teaching Practice に対する振り返り

授業は2時間構成で、1時間目に紙相撲の説明と作成、2時間目にペアで紙相撲対戦を行った。実践において大切にすることは、伝わりやすさと分かりやすさである。これまでの経験から、オンライン授業においては通信回線や機器の情報によって音声聞き取りにくくなったり、途切れたりすることが予想された。それを補うために、指示や説明をなるべくシンプルな英文にしてスライドにも文字で示したり、図や動画を提示したりした。

1時間目の紙相撲作りでは、スライドに作り方の手順を示したことで、子どもたちはそれを見ながら進めることができた。当初は手順ごとに順を追って説明する予定だったが、自分たちで作業を進めることができていたので、割愛することとした。しかし、力士の顔を描くときに紙を開いた状態で正面向きの顔を描く子がいたので、紙を折った時に向かい合うよう横向きの顔を描くよう伝えるべきだったと反省している。

2時間目は紙相撲の遊び方を動画で提示した。機材トラブルで音声は出なかったが、説明のテロップがあったお陰で、子どもたちにも分かりやすかったようだった。そのため、細かい説明をしなくても、見様見真似で楽しみながら取り組む様子が見られた。現地の亀井先生が個別の様子をタブレットで撮影して回ってくださったので、画面越しに活動中の子どもたちともコミュニケーションを取ることもできた。当初、紙相撲対戦は2回を予定していたが、子どもたちは勝負がつくとすぐにまた土俵に力士を置き、自分たちでどんどん遊びを楽しんでいた。その姿から、オンラインであっても、工夫次第で子どもの意欲的な学習につなげることができると感じることができた。

3. 終わりに

自分にとって初めてのオンライン授業実践がオーストラリアの子どもたちへの英語での授業ということで、大変貴重な経験となった。拙い英語力であっても、活動内容の工夫や視覚的な補助を用いたりすることで、海外の子どもたちにも授業ができる手ごたえを感じることができた。一方で、コロナ禍における様々な制約から、授業づくりの難しさを感じる場面もあった。しかし、何事も経験してみなければ分からないことである。本講義を通して、オンライン授業における可能性と課題を見付けることができたので、今回の経験を今後の授業実践に生かしていきたい。

海外教育研究

先端教科・領域開発研究コース

池田 実千代 (M2)

1. はじめに

私は、かつてオーストラリアで日本語教師のボランティアとして小学校で半年ほど活動した経験があり、将来的には日本の公立小中学校で、外国籍児童生徒等の日本語教育に携わりたいという思いがあります。現在は、中学校英語教員の現職大学院生として、英語教育や第二言語習得に関心を持って学んでいます。そこで、オーストラリアの子ども達と日本語教育を通して交流し、学ぶことができる機会を得ることができるというこの海外教育研究に臨みました。

2. 教育の比較

現地校の視察を実際に行った訳ではないので、私自身は、あまり教育を比較するという視点を持ちながらこの研修に臨んではいなかったように思います。しかし、授業時間の合間に休み時間や教室移動のための時間が確保されている訳ではないということや、午前と午後の授業時間の長さが異なっていることなどを知ることができたので、実際に授業を行う場合には、授業の流れや活動時間の取り方を調節する必要があるということが分かりました。

3. Teaching Practice に対する振り返り

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、現地校の教室にいる子ども達と授業を行うことができるのか、または、各家庭にいるそれぞれの子ども達とを繋ぐ形のオンライン授業を行うことになるのかは状況次第であるということだったので、子ども達自身に道具を準備させて取り組む活動は計画しない方が良さだろうと考えました。そのため、言葉やジェスチャーを使った活動になるように「“はぁ”というゲーム」というものをするよう計画しました。

実際の授業では、子ども達が表情やジェスチャーを使って、楽しげに練習をしたり、カメラの前で生き生きと演技をしたりしていた様子を見ることができて良かったと感じました。しかし、子ども達にとっては、説明を聞いたり、発音練習やクイズを出し合う場面でも単調な活動がしばらく続いたりしてしまったので、子ども達を飽きさせないようにする工夫をもう少し加えることができれば良かったと感じました。

4. 終わりに

私自身は英語教員として、英語を使わざるを得ない状況で授業をするという体験ができたことがとても良い経験になったと感じました。「“はぁ”というゲーム」を活動として行うにあたり、「驚いて言う時の“え”」、「聞き返す時に言う“え”」、「不満げに言う時の“えー”」などを英語で説明するのに、どのような言葉がその場面を説明するのに適する表現かを考えること自体も、言葉のニュアンスを伝える上で私たちにとって学びが多くあったと感じました。また、授業の中でも、もっと状況を見てその場にあった指示を出したり、タイムリーな場面で、適切な賞賛を与えたりすることなどができるよう、もっと自分自身の英語力を高めたいと感じることもできました。

海外とのオンライン授業という設定や、受講生同士の授業準備自体もオンライン中心で進めなければならない状況などにおかれ、とても制約が多かったことで、大変な授業作りとなりましたが、藤谷先生、亀井先生には、更に変なご準備やご支援を賜り、何とか無事研修を終えることができました。

先生方を始め、一緒に授業作りをして下さった受講生の皆様、ご協力いただいたWM校児童の皆様にも大変感謝しています。この度は、大変貴重で学びの多い経験をする事ができたと感じています。本当に、ありがとうございました。

記録写真

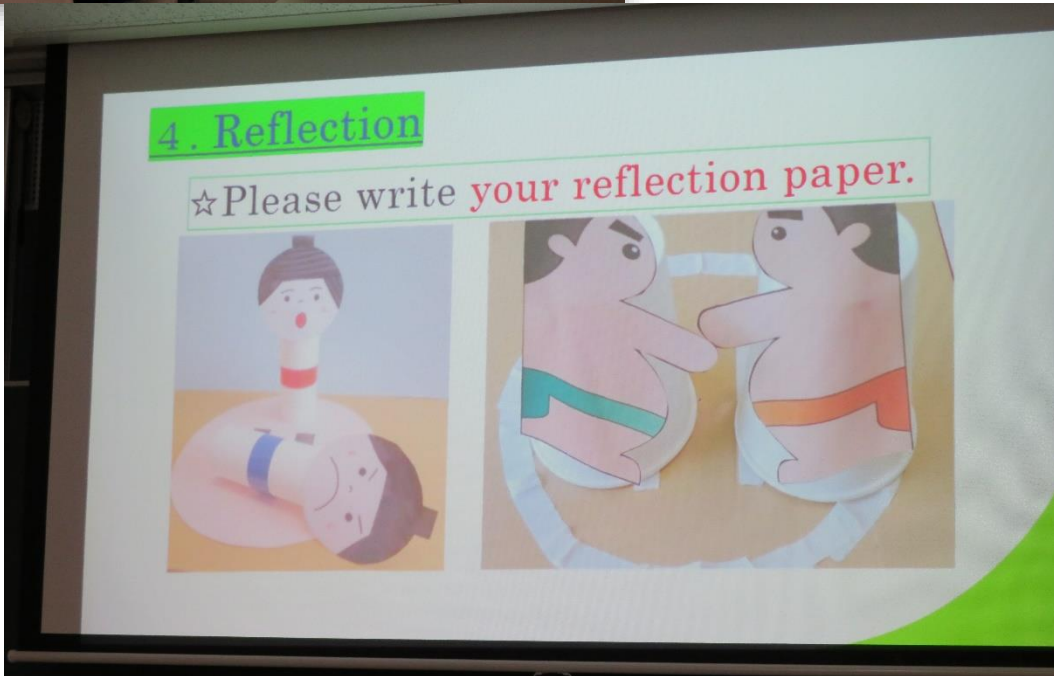




ウエストミンスター・スクール校からの写真



上越教育大学からの写真



上越教育大学からの写真

